自然賛歌

不思議な銀杏の木

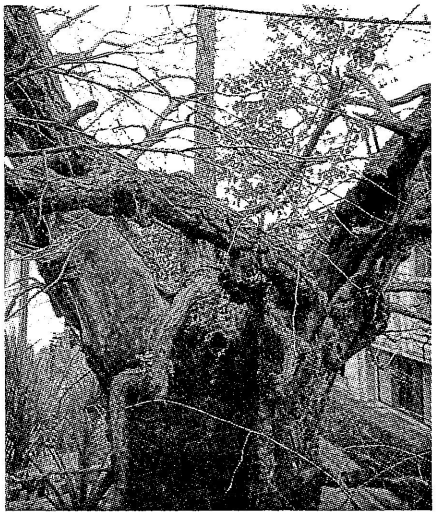
妹尾　治人

廿日市地御前小学校南側に大きなイチョウ（銀杏・公孫樹）の木がある。

このイチョウの木は昭和六〇年に天然記念物として市の重要文化財に指定されているもので、標識に樹高一六メートル、胸高幹囲三一八センチメートル、直径一一〇センチメートル。イチョウは中生代（巨大爬虫類が全盛をきわめた頃）の原始的な裸子植物、中国原産で日本には自生はない。そんな説明が付けられている。

不思議なことに、この木は幹が途中で二本になり、その分岐ところに何か他の樹木が生えている。夏の間ははよく判らなかったが、イチョウの葉が落ちたら青い葉の植物が見えるようになった。道路からではよく判らないので、学校で梯子を借りて登って見ると、そこにはネズミモチ三本、ナンテン二本、それに、イチョウの実生と思われるもの一本が根付いて生長していた。

人間の頭に木が生えて、それが大きくなったのでその木を切ったら、池ができて魚が棲むようになり魚釣りをした。という話があるが、それはお伽噺の世界のことであり、このイチョウの頭に生えた木は現実のことで、何とも不思議なことがあるものだと我が目を疑ったものである。〔写真参照〕



地御前小学校の銀杏の木

どうしてこうなったのか推理してみよう。イチョウの主幹が二本になった理由は、台風か人手によるものか判らないが、主幹が損傷し、そこから二本の枝が主幹になった。損傷した部分は腐蝕により空洞となり、それに落ち葉が堆積し腐葉土が出来た。木の実を食べる小鳥（おそらくヒヨ鳥と思われる）がそこに糞をする。その糞の中にあった不消化のネズミモチ・ナンテンの種子が運よく芽生えた。イチョウは、小鳥に運ばれたのではなく自分の種子が空洞に落ち込んで芽生えたもので、その幼木の根が親木の幹伝いに地下まで達しているのが見られる。イチョウはよく乳と呼ばれる気根が垂れ下がることがあるが、これとは全く異なるもので、空洞に芽生えたイチョウの根に間違いないものと思う。

二又になったこのイチョウの樹齢は記録がなく不明であるが、少なくとも二〇〇年以上と思われる。今から二〇〇年前といえば寛政十二年（一八〇〇）で、江戸時代後半からこの場所にあって、地御前の遷り変わりや、庶民の生き様をつぶさに見て来たことであろう。連綿と今に続く厳島神社の管弦祭はいうまでもなく、明治六年に現在の地御前小学校の前身である心隣舎が開校したこと、明治一三年廿日市―大竹間の国道開通、明治二四年台風による地御前神社拝殿の倒壊、明治三〇年の山陽鉄道開通などなど、古い歴史の生き証人である。　平成一一年に胸高幹囲を測ってみると、三二三センチメートルで、天然記念物に指定された昭和六〇年から約五センチメートル大きくなっているが、樹皮が大きく剥げて樹勢が弱っているので、樹木医などの診断を受けて大事に見守ってやりたいものである

〃記念の木千年生きよ大銀杏〃

（自然観察指導員）